

## 研究ノート

## 保護者に対する保育活動の伝え方の変更による効果の検討 — アンケートの分析から見てきたこと —

藤川 志つ子

(受理日：2022年1月12日)

### Examining the Effects of Changing the Way to Communicate Childcare Activities to Parents: Analyses of Questionnaires

Shitsuko FUJIKAWA

## 要旨

本稿は、A保育園が取り組んだ、保護者に向けての保育活動の発信方法を文章から写真を交えた保育ドキュメンテーションに変更した後に、保護者に対してアンケート調査を行った結果を報告するものである。その結果、文章のみでの発信と比べて、保育ドキュメンテーションでの伝達方法の方が、保育者が行っている保育活動への理解ができたことや我が子とのコミュニケーションの質の向上に加えて、保護者同士のコミュニケーションの充実につながったという結果が得られた。保育ドキュメンテーションを作成する保育者の負担への懸念等課題は残されるが、保育活動を視覚的に伝えることが保護者の安心につながり、子どもや保育者と保育活動を共有することや、子どもの育ちに見通しをもって関わる事が出来ることに加え、保護者同士のコミュニケーションのきっかけになることも示された。

キーワード：保育活動、意図の伝達、保育ドキュメンテーション、保育者の専門性、子育て支援、乳幼児の育ち

## 1. はじめに

保育所保育指針<sup>1)</sup>には、2008年(平成20年)の改定より、「保護者に対する支援」が新たに章として設けられ、その後もさらに子育て家庭に対する支援の必要性は高まり、2018年(平成30年)に施行された保育所保育指針では「保護者に対する支援」の章を「子育て支援」に改め、記載内容の整理と充実を図っている。また、2015年(平成27年)より施行された、子ども・子育て支援新制度の背景には、保育所には保護者と連携して子どもの育ちを支えるという視点を持ち、子どもの育ちを保護者とともに喜び合うことを重視して支援を行うということが強調されている。こうしたことを踏まえ、2018年(平成30年)に施行された保育所保育指針の第4章子育て支援では、改定前と同様に、子育て家庭に対する支援についての基本的

事項を示した上で、保育所を利用している保護者に対する子育て支援と、地域の保護者等に対する子育て支援について述べる構成となっている。ここには、基本的事項に改定前の保育所保育指針の考え方等を踏襲しながら、記載内容の整理に加え、「保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるように努める」ことを明記している。さらに、第4章子育て支援の冒頭では、保育所における保護者に対する子育て支援は、子どもの育ちを家庭と連携して支援していくと記載しており、保育所における子育て支援は、保護者と連携して子どもの育ちを支える視点を持つことを強調している。当然のことではあるが、子どもの育ちを支えるためには「保護者と共に」という視点を持つことは極めて重要な事として意識していく必要がある。また、2. 保育所を利用している保護者に

対する子育て支援 では(1)保護者との相互理解として、ア 日常の保育に関連した様々な機会を活用し子どもの日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明などを通して、保護者との相互理解を図るよう努めること。と示している。つまり、保育者が子どもに対して行う保育内容を保護者がその保育の意図を理解できるように説明することが強く望まれているということになる。その手段や機会として、連絡帳、保護者へのお便り、送迎時の対話、個人面談、家庭訪問、保護者会等を挙げており、その内容や実施方法については各園の特性に合わせて工夫するようにと保育所保育指針に明記している。

近年、保育の現場では保育内容の保護者向けの発信として、また保育者自身の保育内容の振り返りや子ども理解の記録として「幼児教育のドキュメンテーション<sup>(注2)</sup>(以下保育ドキュメンテーション)」を活用している保育施設(こども園、保育所、幼稚園)での取り組みの報告がされている(請川他2016<sup>2)</sup>、岩田・大豆生田2018<sup>3)</sup>)。子どもの活動プロセスを「見える化」することによって、日々の遊びや生活の学びを保護者と共有する手立てとなると示唆している(上田2019<sup>4)</sup>)また、辻谷らはホームページを活用し保護者だけでなく地域の住民に対して子どもの姿や保育内容を視覚的な手立てを使って紹介することは、地域に開かれた保育という視点から意義があるとしている(辻谷他2017<sup>5)</sup>)。

これらの研究結果からも、保護者に子どもの育ちを伝え、保育者の保育を共有していく手立てとして、保育ドキュメンテーションを活用していくことは、保育の理解に加えて、子育て支援の観点でも意義があると考えられる。

今回、筆者が定期的に実施している園内研修会で子育て支援の手立てとして、写真を活かした保育ドキュメンテーションの取り組みを紹介したことがきっかけとなり、保育者が主体的に保護者への保育活動の発信として保育ドキュメンテーションに取り組んだ活動の結果について報告する。これまでA保育園では、園からの保護者への保育活動の発信は、文字媒体での毎日の「保育だいありー<sup>(資料1)</sup>」と毎月の園だよりであった。視覚的

な発信としては、行事などのスナップ写真をホームページ上に掲載することが中心であり、写真を使用して、保育活動や保育活動のプロセスを「見える化」した情報発信の取り組みはなされていなかった。本稿では、保護者に対して保育活動の伝え方を保育ドキュメンテーションに変更したことによる効果についてアンケート調査を通して明らかにすることを第1の目的とした。更に自由記述分析から、その具体的な声について整理することを第2の目的とした。

## 2. 研究方法

関東南部地区にあるA保育園は産休明けから就学前の子ども保育を行う定員100名の認可保育園である。保育園を利用する0歳児クラスから5歳児クラス101世帯の保護者にアンケートの協力を依頼し、研究主旨に賛同が得られた世帯の結果を分析した。

### アンケート実施時期

2019年11月21日(木)～2019年12月2日(月)

### 回収方法

個人が特定されないように園内に設置した回収ボックスにて回収した。

### アンケート内容

保護者に対してこれまでの保育活動の発信ツール「保育だいありー<sup>(資料1)</sup>」での発信と「保育ドキュメンテーション<sup>(資料2)</sup>」での発信それぞれについて、設問1「保育活動のわかりやすさ」設問2「保育活動について子どもに語りかけているか」、設問3「家庭に帰ってから家族で話題にしているか」、設問4「読んだ後、保育者と保育活動を共有しているか」の設問を設定し、それぞれに対して5件法で回答を求めた。その他、保育園からの発信の仕方についての意見を自由記述での回答を求めた。

自由記述の分析については、KJ法を用いた。KJ法は得られた情報に対して、グルーピングやラベリング、図解化、文章化などの手順を踏んでいくことで、情報の傾向を見るために有効な手法と考えられる。

### 倫理的配慮

本研究にあたっては、研究協力者に向けて研究の概要や主旨の説明、更に調査の辞退の自由があ

ること、収集された内容については研究目的のみ使用すること、公表する場合は個人を特定できないよう細心の注意を払うことを書面により説明した上で、協力者の自由意志のもと、研究協力への同意を得ている。また、本稿に掲載した画像等については、本人及び保護者の同意を得ている。

### 3. 結果

配布したアンケートは56世帯から協力を得た(回収率55%)。回収状況の内訳は、年齢別に0歳児67%、1歳児69%、2歳児78%、3歳児64%、4歳児35%、5歳児26%であった(表1)。

表1 年齢別に見た回収率

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
回収率	67%	69%	78%	64%	35%	26%

#### 設問1「保育だいいりー」と「ドキュメンテーション」の保育活動についてのわかりやすさの比較について

図1に示したように、「わかりやすい」「ややわかりやすい」を合計した結果、保育だいいりー86%、ドキュメンテーション91%となっており、ドキュメンテーションでの掲示の方が、保育活動がわかりやすいという結果であった。

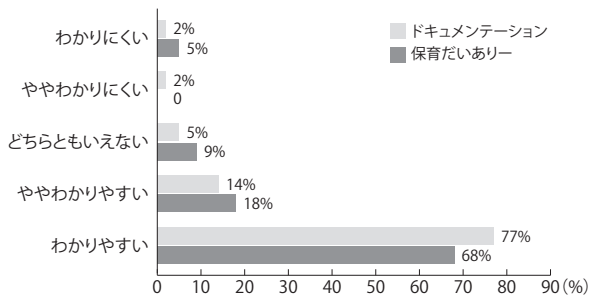


図1 保育だいいりーとドキュメンテーションのわかりやすさの比較

#### 設問2「保育活動について子どもへ語りかけているか」の比較について

図2に示したように、保育活動について子どもへ語りかけを「毎回している」と回答した保護者がドキュメンテーション63%であり、保育だいいりー50%であった。ドキュメンテーションで保育内容を伝えたほうが、子どもと話題にすることや、語りかけが多くなっていると意識している保護者

が多いという結果となっていた。また、「していない」と回答した保護者はドキュメンテーションでは0%という結果であった。

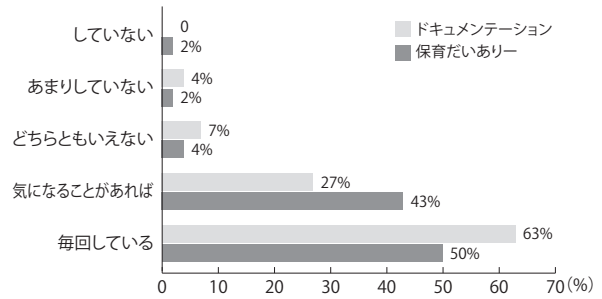


図2 保育内容について子どもへ語りかけているかどうかの比較

#### 設問3「家庭に帰ってから家族で話題にしているか」の比較について

図3に示したように、「毎回している」「気になることがあれば」と回答した保護者は、保育だいいりー88%、ドキュメンテーション90%であり、ドキュメンテーションの方がやや高いという結果であった。

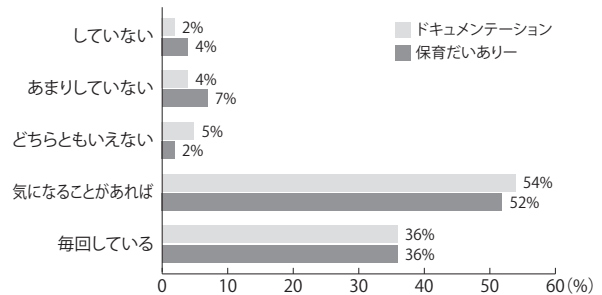


図3 家庭に帰ってから家族で話題にしているかどうかの比較

#### 設問4「読んだ後、保育者と保育活動を共有しているか」の比較について

図4に示したように「毎回している」「気になることがあれば」を合計して保育だいいりーは56%でありドキュメンテーション50%であり、保育だいいりーの方が高いという結果であった。

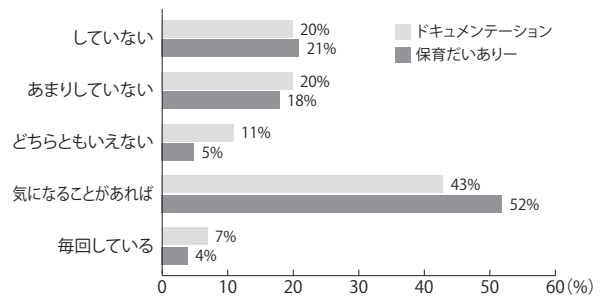


図4 読んだ後、保育者と保育内容を共有しているかどうかの比較

## 保育園からの発信の仕方についての自由記述欄について

自由記述欄に書かれた文章は77文であった。その中で同じ内容と判断された文章については同一内容として表に記載した。その文章はKJ法を用いて分類し、カテゴリ名を付け整理し、その結果を表2に示した。

「写真やコメントがあることで、親子で一緒に楽しめるし分かりやすい」「子どもに質問しやすい」「具体的に話ができるので子どもとのコミュニケーションが広がった」「子どもが指さしながら説明してくれる」「子どもが自分から出来事を教えてくれるようになった」「掲示を見ると子どもが手を引き保育園での事を話してくれる」「親子で楽しみに見えています」などで示される『子どもとのコミュニケーションの質の向上』、「我が子が友だちとどうかかわっているのがわかって、他の保護者との距離が近くなったように感じた」「他の子どもの様子もわかって、保護者同士の会話のきっかけになった」「祖父母との会話のきっかけになった」等で示される『保護者間のコミュニケーションのきっかけ』「普段どのような生活がイメージできるのでうれしい」「色々な経験をさせていただいているのだと驚いた」「どのように過ごしているのかわかって安心につながります」「共育て・共育ちを感じています」等で示される『生活の可視化による安心』「次はこんなことをするんだ」「成長するとこんなこともできるのかなと楽しみになった」等で示される『成長の見通し』「ありがたいですが忙しいと思いますので、無理のない範囲でお願いしたい」「先生方無理しないでください」「お忙しい中発信をしていただいておりますのでお休みできるのか心配になります」等で示される『保育者の負担感について』「リアルタイムに活動した事を写真付で掲示」「タイミングが即時に近い形」「タイムリーに掲示していただく事ですぐに子どもと話ができる」等で示される『即時性』の6つのカテゴリに分類出来た。

## 4. 考察

分析結果から、保育活動の発信方法を「見える化」したことにより、保育者が日常保育の中で行っている保育活動の内容について、文字媒体での

伝達と比較し大きな差ではなかったが、保育ドキュメンテーションの方がわかりやすくなったという結果が得られた。この微量な差は、保護者にとっては「慣れた」発信方法のほうに馴染みがあり、安心できるということが一因として考えられる。

しかし、自由記述の内容を確認してみると、多くの保護者が保育ドキュメンテーションでの発信を受けて、子どもとの関係性や保護者間での関係性の変化、更には自身の子どもへ見通しを持った関わりという変化を感じているという意見をあげていた。最も多かった『子どもとのコミュニケーションの質の向上』にカテゴリ化された内容を確認してみると、「会話がとってははずみ…」「限られた時間の中で日々の様子を話すきっかけとなった」「掲示物を通し「こんな事したよ」「ここに行つたよ」と出来事を教えてくれます」「掲示物を見ると子どもが手を引き保育園での出来事を話してくれる」等から、写真を使って保育活動を「見える化」し、保育の意図や活動のプロセスのコメント付けたことが、親子で保育を再体験することにもつながったのだと考えられる。さらに、ことばを獲得途中の子どもであっても、ドキュメンテーションを指さして保護者に知らせることで、知らせる喜びと受容してもらえる喜びを感じられ、保護者にとっては、我が子が伝えてくれた成長の喜びを感じられることにつながったと思われる。このことは、保育所保育指針第4章子育て支援に記載されている、保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるように努めると合致する営みである。また、保育所の送迎は保護者だけではなく、祖父母やファミリーサポートも担うことも考えると、ドキュメンテーションで保育活動を伝えることが、保護者だけの理解に留まることなく、多様な人への保育理解につながると思われる。さらに、『保護者間のコミュニケーションのきっかけ』であげられていた、他の子どもの様子もわかって保護者同士の会話のきっかけとなった。等の意見から、保護者同士をつなぐ会話のきっかけとして機能することや、「我が子が友達とどうかかわっているかが分かって…」等の表記から、家庭では見られない我が子の姿を知る喜びとなっていくと考えられる。また、『生活の可視化による安心』



表2 保育所からの発信の仕方についての自由記述

n = 77

カテゴリ	記述内容
子どもとのコミュニケーションの質の向上	写真やコメントがあることで、親子で一緒に楽しめるし分かりやすい。
	写真やコメントがあるので、子どもに質問しやすい。
	具体的に話ができるので子どもとのコミュニケーションが広がった。
	子どもが指さしながら説明してくれる。
	子どもが自分から出来事を教えてくれるようになった。
	掲示を見ると子どもが手を引き保育園でのことを話してくれる。
	会話がとてはずみ、こちらが疲れてしまうぐらいで、うれしいです。
	掲示物を通して子どもが「こんな事したよ!」「ここに行ったよ!」と出来事を教えてくれます。
	限られた時間の中で日々の様子を話すきっかけとなり、よりコミュニケーションが取りやすくなったような気がします。
	親子で楽しみに見ている。
保護者間のコミュニケーションのきっかけ	わが子が友達とどうかわっているかが分かって、他の保護者との距離が近くなったように感じた。
	他の子どもの様子も分かって、保護者同士の会話のきっかけになった。
	祖父母もわかりやすくていいねと言っていた。
	写真があることで他のお子さんや保護者と話すきっかけになり、関係も出来てありがたく思っています。
生活の可視化による安心	普段どのような生活かイメージできるのでうれしい。
	色々な経験をさせていただいているのだと驚いた。
	どのように過ごしているのかわかって安心につながります。
	共育て・共育ちを感じています。
	時間外が多いため、送迎時に先生達と話せる機会があまりないため、写真や保育活動記録で保育の様子がわかって良いと思います。
	子どもたちの生き生きした表情、家庭ではみられない姿が良く観察出来て嬉しく思います。
	時間外を利用しているため、担任の先生とお話できる機会は限られていますが様々な形で保育活動を知ることが出来てありがたく感じています。
日々を可視化していただき、親としては見ごたえがあつてありがたく思っています。	
送り迎えが楽しみになった。	
成長の見通しが持てた	次はこんなことをするんだと思える。
	成長するとこんなこともできるのかなと楽しみになった。
	我が子のクラスの様子だけではなく「来年はこういうこともするんだなあ」と想像しやすくなりました。
	園での様子やクラス間の関わりを知る機会が増えた。
	他の組の活動についても、子どもが大きくなった時のことを想像しワクワクしています。
保育者の負担感について	先生方に負担をおかけしていないかどうか心配です。
	先生方も大変だと思いますが、写真での掲示物も楽しみにしているのでよろしくをお願いします。
	先生達のお忙しい中での細やかなお気遣いを感じ大変ありがたく思っています。ぜひ続けて欲しいです。これからも無理のない程度に是非よろしくをお願いします。
	今までなかったことなので、先生方の仕事が増えて大変なのでは…とも思い申し訳ない気持ちにもなります。
	気になる点は先生方がお忙しい中、大きな負担になっていないかということです。ご無理のない範囲でしていただけたら幸いです。
	いつも忙しい中で、あの様な手の込んだ掲示物を作成いただくのは、先生方が大変ではないかと思えます。
	先生方が大変ではないか心配になります。
	「いつ作ったのか」「先生休めているかしら」「負担になっていないかしら」と心配になりました。
即時性	リアルタイムに活動した事を写真付で掲示してあり、いつも楽しんでみえています。
	貼りだしてくださるタイミングが即時に近い形なので驚いています。
	写真などをタイムリーに掲示していただく事ですぐに子どもと話ができる。
	スピーディな対応に感謝しております。

を保護者が得たことにより、保育者への信頼が厚くなり、より良い関係性の構築につながったのではないかと推測される。また、『成長の見通しが持てた』にカテゴリズされた内容からは、保護者が子どもの成長・発達に見通しをもって関わることで得られる、心理的な余裕と成長の楽しみの両側面を支えることにつながると思われた。

箕輪 (2019<sup>6)</sup>) は保護者へ「保育を伝える工夫」についてシンポジウムで、保育者が参加したディスカッションの結果から「保護者にとっての見やすさ」「保護者にとってのわかりやすさ」「タイムリー性」「伝えたい内容」「保護者」「園・保育者」の6つの上位カテゴリを抽出している。その内容は、図やイラスト、写真を使い視覚的にわかりやすくする、保護者の目線に立ち保育活動の内容や子どもの姿を理解できるような書き方や伝え方の工夫、更にタイムリーに伝えることで、その日その時の子どもの様子についてリアリティをもって発信できるようにする工夫、また、保護者には見えにくい保育のプロセスを解説する事、保護者が子育ての主体として意識を持てるように保護者と子どものコミュニケーションのきっかけになるようにすること、等をあげている。これは、本稿で述べた保護者のアンケート調査の分析結果と一致する内容であった。

以上の事から、保育内容をドキュメンテーションを使用して伝達していくことは、保育者と保護者が保育内容を共有し、共通の話題とすることができ、包括的な子育て支援の方略として有効になるのではないかと考えられる。また、保育園内で行われている「保育のプロセス」や「保育者の関わりの意図や想い」「子どもと子どもとのつながり」が見えることで、保育者の行為の意味が伝わり、保護者の安心感が生まれるのではないかとと思われる。坂崎 (2013<sup>7)</sup>) らは、長時間保育を利用する保護者に対して、保育の目的を伝えることや、その保育によって子どもの育ちや保育の成果はいかなるものであったかを伝える手立てとして、連絡帳や園だより等では十分に伝えることが難しいという事を指摘しており、保育ドキュメンテーションでの伝達がそのことを払拭できる可能性を示唆している。本調査での自由記述からも、時間外を

利用している保護者から、文字媒体のみの伝達から保育ドキュメンテーションでの伝達に変わったことにより、保育活動がより理解でき安心につながったという意見が確認されている。安心という視点は保育の営みの中で、大切にされるべき視点である。柴崎ら (2016<sup>8)</sup>) は、保護者に向けたお便りなどの情報は、保育者の目を通して子どもの姿を知ることにつながり、保護者の子どもを見る目が豊かになっていく可能性を指摘している。つまり保護者にとって、保育者が専門家の視点をもって、園で生活する子どもの姿や、育ち、そして保育に込められた意図などを伝えることが、園内で行われている保育内容の理解や子どもの育ちの理解を促すための重要なコミュニケーションツールになると言える。有効なコミュニケーションツールとして機能するために、写真等の視覚的な媒体を活用し、実際の子どもの姿、保育者の思いを保護者に伝わるように具体的に書くことが、子どもの育ちを共に喜んでいこうというメッセージにつながっているのではないかと考える。写真等の視覚的な媒体を使用することは、心理学の分野では画像優位性効果 (PSE: Picture Superiority) として、文字や言葉だけで伝えるよりも、同時に画像を含んで伝えたほうが記憶に残りやすく理解しやすいとその現象を説明している。人間の脳は言葉よりも、図や写真の方がイメージとして伝わりやすく、認識されやすい傾向があるということからも、写真等の視覚的な媒体を積極的に活用することは有効であると言える。

## 5. 今後の課題

本稿では、保育活動の伝え方の変更による効果について、保護者に対してアンケート調査を行い、その内容の検討を行った。ほとんどの保護者は、文章のみでの発信より、保育ドキュメンテーションでの発信のほうが、保育内容が理解できたという結果であった。さらに、自由記述の内容からは、保育内容理解の他、子どもや保護者間でのコミュニケーションの充実や子育てに見通しを持てるといった声も得られ、保育活動を発信する手だてとして保育ドキュメンテーションの有効性が示されたといえる。しかし、「今までなかったことなので、先生方のお仕事が増えて大変なのでは…」 「い

つ作ったのか。休めているのか。」「先生方にご負担をおかけしていないか」等、『保育者の負担感』にカテゴライズされた、発信者としての保育者の声については取り上げていなかった。

今回の取り組みは、園内研修を受けた保育者が主体的に保護者への保育活動の発信として保育ドキュメンテーションに取り組んだが、今後保育ドキュメンテーションを継続して発信の手立てとしていくために、発信者である保育者はどのように感じているのかを明らかにし、双方にとって有効な手立てを検討していくことが必要と考えられる。

**謝辞**

本研究のアンケート調査にご協力いただきましたA保育園の保護者の皆様方、A保育園の園長をはじめ保育者の皆様に感謝の意を表します。

**注**

注1) 本研究は、2019年5月に日本保育学会第72回大会でポスター発表した内容を追加修正したものである。

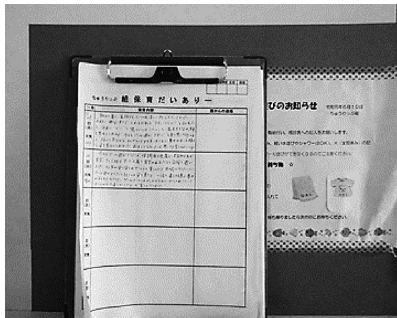
注2) イタリアのレッジョ・エミリア市から発祥した教育思想のひとつで、子どもの活動や写真、動画、音声、文字などで視覚的に記録するというもの。子どもの思考・探究活動を具体的に記録し、子ども自身が活動を振り返り次の活動へ活かすことを目的としているが、現在日本では「保育活動記録の見える化」「保育で行った事を記録」とい

た意味合いで用いられることが多い。

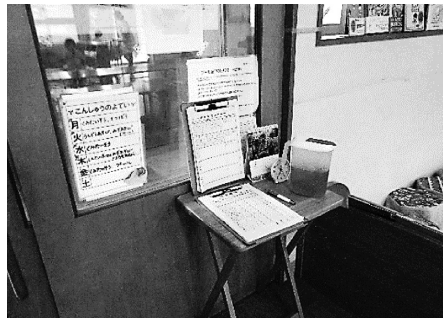
**参考文献**

- 1) 厚生労働省 保育所保育指針解説(2018) フレーベル館
- 2) 請川滋大他 (2016)「保育におけるドキュメンテーションの活用」ななみ書房
- 3) 岩田恵子・大豆生田啓友 (2018) 保育の可視化へのプロセス 玉川大学学術研究所紀要, 24, 1-13
- 4) 上田敏丈他 (2019)「子ども理解の理論及び方法」萌文書林
- 5) 辻谷真知子他 (2017)「幼稚園ホームページの記述スタイル：子どもの姿を描常設の項目と更新する項目に着目して」『国際幼児教育研究』24
- 6) 箕輪潤子 (2019)「保護者とのコミュニケーションの工夫」園・家庭・地域がともに育ちあうコミュニケーションシステムの工夫～伝え合うための実践知を探る～ 公益財団法人野間教育研究所 幼児教育研究部会セミナー報告
- 7) 坂崎隆浩他 (2013)「安全・安心—地域と子どもの環境— (保育ドキュメンテーションを用いて)」保育科学研究 第4巻
- 8) 柴崎正行・会森恵美 (2016)「保育所における保護者支援についての検討：『クラス便り』の分析を通して」大妻女子大学家政系研究紀要 第52巻

資料1-1)



資料1-2)



資料2)

